

# Dx



## キーワードから読み解くDX



# 今回のキーワード 生成AIってどんなもの？

2022年末のChatGPTの公開以来、注目を集め続けている生成AI。その便利さに驚きながら、「リスクも多そう」と傍観している方も多いかもしれません。しかし、驚くべきスピードで進化を続ける生成AIは、今後更に社会やビジネスに革新をもたらすことは確実です。よく知らないものは怖く感じがち。そこでまずは生成AIとはどんなものなのか、そのリスクも含めて知っておきましょう。



## 公開後すぐにユーザー1億人越え

入力した質問に自然な日本語で答えたり、指定された条件に基づいてイラストを描いたり。生成AIとは、コンピュータがディープラーニングなどで大量のデータを学習することによって、与えられたデータやパターンから文章や画像、音声など新たなデータを生成する技術です。

生成AIの中でもチャットGPTは、2022年11月末に公開され、翌年1月には早くも1億人のアクティブユーザー数を記録しました。

当初はチャット形式でのやりとりのみでしたが、その技術は日々進化し、現在では画像や音声、動画など様々なデータを入力・生成することができるようになっています(図1)。

図1 生成AIの主な種類 ※2024年3月現在

<b>テキスト・コード</b> テキスト/プログラミングコードを生成 <small>参考文献を添付すると精度アップ</small>	<b>画像</b> オリジナル画像を生成 <small>参考画像を添付すると精度アップ</small>
<b>音声・楽曲</b> オリジナル音声・楽曲を生成 <small>参考音声を添付すると精度アップ</small>	<b>動画</b> オリジナル動画を生成 <small>参考画像・動画を添付すると精度アップ</small>

※監修者により作成

## DXの可能性を広げる生成AI

これだけ様々なことができるようになると、業務への活用の可能性も広がり、企業や自治体においても生成AIの活用例が増えています。

ここで、IT、DXと生成AIとの関係をあらためて整理してみましよう。まずは混同されることの多いITとDXの関係ですが、しばしばDXの一環だと考えられているそれぞれの要素を、建物にあてはめて説明するとわかりやすいと思います(図2)。まず1階は、ビジネスを始めるときに必須なIT化で、ドメインを取得して会社のメールアドレスを準備したり、コーポレートサイトを作ったりといったことが、これにあたります。そのうえで2階の、コア業務のシステム化ができるようになります。その後は、集客の仕組みをシステム化する3階、蓄積されたデータを経営に活用する4階へと続きます。ここまでは「IT化」です。

本当のDXはこの先の5階で、「イノベーションとサービスの多角化」です。「サービスの多角化」は「外部連携」とも言い換えられます。他社とアライアンスを組んだり、ジョイントベンチャーのような形もあり得ます。「イノベーション」は難しく考えられがちですが、要は、社内蓄積されたデータを用いて新しい商品やサービスが挙げられます。

- ・ 漠然とした依頼や抽象的な表現を避ける
- ・ 同じ質問を複数回行う
- ・ 根拠となる情報ソースを回答と合わせて提示してもらう(出典の提示)

なお、日進月歩の成長を遂げている生成AIは、その進化に伴って、できることも起こる問題もどんどん変化しています。今回は、そんな生成AIの未来像と、どのように付き合っていけば良いかについて考えていきたいと思います。

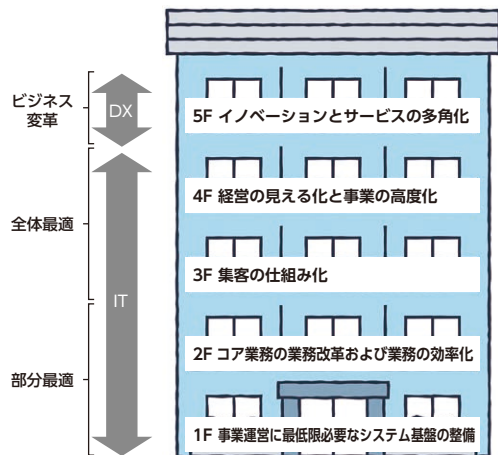
## 生成AIは「嘘」をつく!?

しかし、生成AIの利用にはリスクもあります。生成AIを業務で利用するとき、特に注意しておきたいのは、生成された回答には確実性が担保されていないということです。

「チャットGPTに嘘をつかれた」という話を、利用した人から聞かされた方もいるのではないのでしょうか。もちろん生成AIに悪意はないのですが、結果として嘘をつくことが往々にしてあります。

チャットGPTに代表される大規模言語モデル

図2 ITとDXの関係



※監修者により作成



柴山治(しばやま・おさむ)  
デジタル戦略プランナー/  
危機管理プロフェッショナル

株式会社YOHACK CEO。社名には「YO(世界に)HACK(切り込む)」の意味がある。「人と企業に“余白”が生まれるとき、日本はまた強くなる」と確信し、デジタルを軸に、あらゆる企業のパートナーとして伴走支援している。

2024年3月29日に「日本型デジタル戦略」(クロスメディア・パブリッシング)を刊行。



※内容の確認には「友だち追加」が必要です。